

契丹小字文献所引の漢文古典籍[†]

大竹昌巳

1. はじめに

契丹小字墓誌の銘文中には『詩経』『書経』『易経』『論語』など経書を主とする漢文典籍からの引用が含まれることが、先行研究によって明らかにされている。少なくとも現段階で有力な対訳資料(例えば翻訳仏典等)が知られていない契丹語文献にとっては、この種の訳文が契丹語の語彙・文法を解明する上で重要な意義をもつ¹⁾。このような漢文典籍を原典とする引用文は、現段階で発見・公表されている墓誌銘中に重複を除いて10種類以上確認できるが、先行研究によって典拠が特定されているものは半数を超えない。

そこで本稿では、新たにいくつかの引用文の典拠を明らかにするとともに、すでに典拠が特定されているものについても、その契丹文の言語学的分析をより精密化することを試みる。また、新たに典拠を特定することによって、墓誌銘の撰者がどのように銘文の撰定にあたっていたのかについても少しく論じたい。

2. 典拠の既に明らかなるもの

2.1. 『周易』坤卦

最も多くの契丹小字墓誌に引用されているのが、『周易』(『易経』)の有名な一節である。

(1) 積善之家，必有餘慶；積不善之家，必有餘殃。

【『周易』坤卦・文言伝】

この一節が契丹文墓誌銘中に引用されていることは、愛新覚羅[2004g: 116]や即実[2012: 62]によって発見されている。まず『耶律奴墓誌銘』〔遼寿昌5年(1099)〕のものを挙げる²⁾。

[†] 本稿はJSPS科研費(特別研究員奨励費26・3830)の助成を受けた研究成果の一部である。

1) 現在までに発見されている契丹小字文献において最も長い対訳刻文は、唐の乾陵の無字碑上に彫られた『大金皇弟都統経略郎君行記』〔金天会12年(1134)〕だが、契丹文は僅か5行94字しかない。契丹文の左に5行104字からなる漢文が刻され、その左に「右譯前言」とあることから、漢文は契丹文の翻訳であることが判る。当碑文以外に数行からなるような対訳資料は発見されていない。

2) 以下、契丹小字の翻刻、ローマ字転写、グロスは筆者による。詳細は註を参照。

(2) 百勺矢 令勺 又企夫关 斝化峇当 曲兮 伊 来当 止住非 捺
 «Yig»-end tig: “šēmüq^w-ī čęųdey-ēń g^wēr ... čē-ń pül... qũđq^w;
 易-DAT³⁾ 曰く 善い-ACC⁴⁾ 集める-PST.F⁵⁾ 家⁶⁾ 必ず⁷⁾ なす-NPST.F⁸⁾ 余剰の⁹⁾ 福¹⁰⁾

古丸出わ 斝化峇当 曲兮 伊 来当 止住非 引丈丸 欠关
 ...āń-en čęųdey-ēń g^wēr ... čē-ń pül... qajā.” kī.
 悪い.F-ACC¹¹⁾ 集める-PST.F 家 必ず なす-NPST.F 余剰の 禍¹²⁾ と言う.NPST.F¹³⁾

『易』に曰く：「善行を積んだ家は必ずなす，多くの福を。悪行を積んだ家は必ずなす，多くの禍を。」と云う。」【奴 34-35】

このように書物からの引用は <出典 (与位格) tig 引用部分 kē> という形をとることが多い。

『耶律奴墓誌銘』以外にも『周易』のこの箇所を引用した墓誌銘はいくつかあるが、全て微妙に字句が異なっている。以下、重複を恐れず全て挙げる。

-
- 3) 「易」(LMC *yīk, OMC *i)
- 4) 又企夫《善い(こと)》[愛新覚羅 2004g: 116, 即実 2012: 62]。綴字 <eš-ēm-üq^w> から推定される šēmüq^w という再構音は契丹語の音配列としては不自然な印象を受ける。
- 5) /čęųdy-/《集める》[愛新覚羅 2004b: 171, 即実 2012: 62] は自動詞語根 √čęųd-《集まる》[愛新覚羅 2004b: 170] + 使役化・他動詞化接辞 -y-。√čęųd- は MMo. čī'ul-《id.》と同源の可能性がある。動詞や名詞類の文法接尾辞については先行研究として契丹文字研究小組 [1977: 77-93], 高路加 [1988], 清格爾泰 [1992], 愛新覚羅 [2004a, 2004b, 2004c], 呉英喆 [2007] 等があるが、いずれ別稿で取り上げたいので本稿では詳しく触れない。
- 6) √g^wēr《家, 帳》(女性名詞) [即実 1994]。愛新覚羅 [2004f], 愛新覚羅・吉本 [2011: 138] は MMo. ger《id.》の同源語とする。
- 7) 伊《必ず》[愛新覚羅 2004g: 116, 即実 2012: 62]。
- 8) √čē-《する》は MMo. ki-《id.》の同源語と思われる。
- 9) 止住非《余分な, 多くの》[愛新覚羅 2004g: 116, 愛新覚羅・吉本 2011: 141, 即実 2012: 62]。
- 10) √qũđq^w《福》(女性名詞) は MMo. qutug《id.》の同源語 [豊田 1997]。
 ここの 止住非 捺《余慶》は主節述語動詞 来当《なす》の目的語であり、契丹語の通常の語順としては動詞より前にあるべきものである。ここでは原典の漢文の語順に影響されたものと思われるが、このような翻訳文でなくとも、韻文では目的語と述語、主語と述語の語順が転倒する場合がある。
- 11) 古丸出《悪い(こと)》[愛新覚羅 2004g: 116, 愛新覚羅・吉本 2011: 140]。字素 古 の音価は不明だが、MMo. ma'u (M) / ma'uj (F) / ma'un (PL)《悪い》とは無関係と思われる。
- 12) /qajā/《禍》(女性名詞) [愛新覚羅 2004g: 116, 愛新覚羅・吉本 2011: 139, 即実 2012: 62]。
- 13) /kī/ は √kē-《…と言う》の単数女性・非過去形か。√kē- は MMo. ke-《id.》と同源。cf. 呉英喆 [2012a: 108]。

- (3) 来土 关勺矢 令勺 又么糸 妨化岑当 曲岑 仲 来当 止住非 捺
 «Čeŋ̄ īg»-end tig: “šäk-äj čeudey-ēn̄ g^wēr ... čē-n̄ pül... qũdũq^w;
 周¹⁴⁾ 易-DAT 曰く 善い-ACC¹⁵⁾ 集める-PST.F 家 必ず なす-NPST.F 余りの 福

古舟出和 妨化岑当 曲岑 仲 来当 止住非 子|火舟 火关
 ...ān-en čeudey-en̄ g^wēr ... čē-n̄ pül... qajā.” kī.
 悪い-F-ACC 集める-PST.F 家 必ず なす-NPST.F 余りの 禍 と言う.NPST.F

『周易』に曰く：「善行を積んだ家は必ずなす，多くの福を。悪行を積んだ家は必ずなす，多くの禍を。」と云う。」【兀没 35】

- (4) 来土 百勺矢 令勺 又么糸 妨化岑百 曲令 仲 水 止住非
 «Čeŋ̄ yig»-end tig: “šäk-äj čeudey-ej̄ g^wē-d pül...
 周 易-DAT 曰く 善い-ACC 集める-CNJ 家-DAT¹⁶⁾ 必ず ある¹⁷⁾ 余りの

捺 火关
 qũdũq^w.” kī.
 福 と言う.NPST.F

『周易』に曰く：「善行を積むと家には必ずある，多くの福が。」と云う。」【糺里 21】

- (5) 勺矢 又金丈关 妨化岑当 曲令 仲 火火又及羽 止住非 □□用中岑当
 «Iḡ»-end “šēmüq^w-ī čeudey-ēn̄ g^wē-d ... kuḡr-ūj̄ pül... ///illeyēn̄.”
 易-DAT 善い-ACC 集める-PST.F 家-DAT 必ず 至る-ÜJ¹⁸⁾ 余りの 福(?)

叔北九
 kē-leg

と言う-LG¹⁹⁾ 『易』に「善行を積んだ家には必ず至る，多福が。」と云うのは，」【勉辛 20】

- 14) 「周」(LMC *tšičü, OMC *jčü)
 15) √šäk 《善い(こと)》(ɣは語末では消失し，前の母音の長母音化が生じるため，単数主格形は又斗 šāとなる)はMMo. sayi(n)《id.》(OTu. say《健康な》)の同源語[即実 1996: 266]。『類説』巻5所引『燕北雜記』に「捨」是「子」。(「子」は「好」の誤)，『契丹国志』巻27歳時雜記に「捨」是「好」，『遼史』巻53礼志六に「奢」，「好」也。」とある「捨」「奢」(ともにLMC *šja, OMC *šjä)はKhit. šāの音訳[白鳥 1970: 265f, 孫伯君、聶鴻音 2008: 99f]。
 16) R語幹である√g^wēr《家》に与位格接辞-dが接尾する際，語幹末のrは脱落する。
 17) 水《ある》[即実 2012: 62]。字素の音価が不明なため未詳。
 18) √kuḡr-《至る，達する》[契丹文字研究小組 1977: 65]はMMo. kür-《id.》の同源語[即実 1996: 20]。形動詞接辞-ūj̄の意味については更に考える必要がある。
 19) 語根√kē-は註13参照。語叔北九 kē-legは愛新覺羅[2013: 37]の言うように《というもの，ということ》の意味を含むが，形動詞接辞-lgの一般的な意味機能については俟考。

- (6) 又么糸 坊化岑当 曲令 伴 百文 止住非 捺
 “šäv-äi čeudey-ēñ g^wē-d ... yē pül... qūdūq^w.”
 善い-ACC 集める-PST.F 家-DAT 必ず ある.NPST.F²⁰ 余りの 福

「善行を積んだ家には必ずある、多くの福が。」【敵烈 3, 28-29】

- (7) 又企丈夫 坊化岑当 曲令 伴 水 止住非 捺 叔北兀
 “šēmüq^w-ī čeudey-ēñ g^wē-d pül... qūdūq^w.” kē-leg
 善い-ACC 集める-PST.F 家-DAT 必ず ある 余りの 福 と言う-LG

「善行を積んだ家には必ずある、多くの福が。」と云うのは、【仲恭 4】

(5) から分かるように、漢語の「曰、云」に対応する 令句 *tig* は出典を明示する際に必須の要素ではない。

韻文で書かれる銘辞の部分に見られる次の表現も「積善之家必有餘慶」をふまえている。

- (8) 来土 捺 伴 火化 又企丈夫 又么糸 坊化岑当 曲令
 “čeu qūdūq^w ... kujr, šēmüq^w šäv-äi čeudey-ēñ g^wē-d”
 ? 福 必ず 至る.IMP 善い 善い-ACC 集める-PST.F 家-DAT

「××福必ず至れ、善行積みし家に」【勉辛 28】

- (9) 又么糸 坊化岑百 捺岑 内本
 “šäv-äi čeudey-ei qūdūq^w-ēr ā-r”
 善い-ACC 集める-CNJ 福-INST²¹ ある-NPST.M(?)²²

「善行積みて幸福なり」【宣懿 11】

2.2. 『尚書』周書

『尚書』（『書経』）の以下の文も、多くの墓誌銘に引用されている。

- (10) 皇天無親，惟德是輔。

【『尚書』周書・蔡仲之命】

20) 《ある》を意味する動詞である [愛新覚羅 2004b: 175-177] が、愛新覚羅 [2004b] の言うような「無形態変化動詞」ではなく、単数女性・非過去を表す一形式と考えられる。

21) ここの接尾辞 *-ēr* については註 29 参照。即実 [1996: 66] も参照。

22) *√a-* 《(…に) ある、いる；…である》は MMo. a- 《*id.*》の同源語 [王弘力 1986: 61]。

これも同じく愛新覚羅 [2004g: 116] や即実 [2012: 61f] によって発見されている。『周易』の「積善之家必有餘慶」と同じく、墓誌によってヴァリエーションがある。

- (11) 又火厄 令勺 又及 天 公企公和 土平岑百 斗本
 «Šü»-nd tig: “mō ... nēm-d-en euley-ej. ār
 書-DAT²³⁾ 曰く 大きい.M²⁴⁾ 天 近しい-PL-ACC²⁵⁾ もたない-NPST.M²⁶⁾ ただ²⁷⁾
 止爻 令丙刃岑 本升火 天
 pū tēur-ēr arūb-ūj.” kī.
 である.NPST²⁸⁾ 徳-INST²⁹⁾ 輔ける-NPST.M³⁰⁾ と言う.NPST.F

「『書』に曰く：「大いなる天は（特定の）親しい者をもたない。ただ徳のある者をば輔けるのである。」と云う。」【奴 34】

23) 「書」(LMC *šü, OMC *šü)

24) √mox (語末にある場合 mō となる)《大きい》(男性形) [豊田 1991a: 1f, 愛新覚羅 2004c: 180]。被修飾語である 天《天》は男性名詞。

25) √nēm 《近い》 [愛新覚羅・吉本 2011: 135]。cf. 了 公企 岑今 羽和 《40 近い年の間=40 年間近く》【仁先 66】(仁先が出仕した 38 年間に指す。)

26) /euly-/ 《もたない、無くす》 [愛新覚羅・吉本 2011: 138] は自動詞語根 √eū- 《無い》 [劉鳳翥 1987: 64] + 使役化・他動詞化接辞 -ly-。A B-ACC eulyw- 《A は B が無い》。

27) √ār 《ただ…, 独り…》 [即実 2012: 61]。

28) /bū/ は漢語の《是》に相当し [即実 1996: 72], MMo. bū- 《ある》と同源と思われる [愛新覚羅 2004b: 176] が, 2 通りの語順があり, 語順からみる限り (i) はコピュラ動詞のように見えるものの, (ii) はむしろとりたて詞のように見える。ただし (ii) の用法は漢語との接触により生じた可能性がある。

(i) 令巾及内 尔火 丹爻
 todōñ ...uj bū.
 第五の.F 娘子

「五女, (墓主たる) 娘子なり。」【華嚴奴妻 18】

(ii) 升化岑 止爻 半丹 凡火 杰
 qūdēr pū Lāñ guj oŋw.
 第三の.M 梁 国 王

「三男, 是れ (墓主たる) 梁国王。」【知微 4】

29) -ēr はモンゴル語の造格 MMo. -'Ar と同源である [契丹文字研究小組 1977: 85] が, ここで はむしろ MMo. -tU (M) / -tA (F) / -tAn (PL) 《…持ちの》に相当するような意味・機能をもって いるように見える。即実 [2012: 307] も「有徳的」と訳解している。

30) /arw-/ 《輔ける》 [愛新覚羅 2004g: 116, 即実 2012: 71f]。『遼史』卷 31 宮衛志上に「「輔祐 曰「阿魯盃」。」とある「阿魯盃」(LMC *'ā.lu.ū. 'uân, OMC *e.lu.ūon) は契丹小字 本升及内 arūbōñ 《輔佐》に相当する。

- (12) 又矢 又火凡 令勺 又及 矢 公企空和 土平空百 令丙刃火 来欠
 «Šaj šū»-nd tig: “mō ... nēm-d-en eūley-ej. tēūr-ēr čoq”
 尚³¹⁾ 書-DAT 曰く 大きい.M 天 近しい-PL-ACC 無くす-NPST.M 徳-INST のみ³²⁾

及火矢 火矢
 ōy-ī.” kī.
 輔ける(?) -NPST.M³³⁾ と言う.NPST.F

『尚書』に曰く：「大いなる天は（特定の）親しい者をもたない。徳のある者のみを輔ける。」と云う。【兀没 31-32】

- (13) 又矢 又火矢 令勺 又及 矢 公企矢 土平空百 令丙刃火 来欠
 «Šaj šū»-nd tig: “mō ... nēm-end eūley-ej. tēūr-ēr čoq”
 尚 書-DAT 曰く 大きい.M 天 近しい-DAT³⁴⁾ 無くす-NPST.M 徳-INST のみ

本井火 火矢
 arūv-ūi.” kī.
 輔ける-NPST.M と言う.NPST.F

『尚書』に曰く：「大いなる天は親しい者をもたない。徳のある者のみを輔ける。」と云う。【糺里 21】

前小節で見た『周易』の引用であれ、この『尚書』の引用であれ、各墓誌に見られる契丹語訳はいずれも少しずつ異なりがある。このことから、完成された契丹語訳経書が存在し、そこから引用されたという蓋然性は小さい。契丹語訳経書のテキストが幾種類も存在したという蓋然性はさらに小さかろう。

『尚書』の「皇天無親惟徳是輔」をふまえた表現は銘辞の部分でも見られる。

- (14) 又及 矢 公企空和 土平空百 斗本 及火矢 空丙刃 来令
 “mō ... nēm-d-en eūley-ej, ār ōy-ī dēūr čēd”
 大きい.M 天 近しい-PL-ACC 無くす-NPST.M ただ 輔ける(?) -NPST.M 徳 ?

「大いなる天は親しき者無し。ただ輔ける、徳なす者を(?)」【勉辛 28】

31) 「尚」(LMC *šjâŋ, OMC *šjaŋ)

32) √čoq* 《…のみ、…だけ》[即実 2012: 307]。

33) /ōj-/ の義、未詳。即実 [2012: 307] は「給予」とする。

34) この与位格の用法は不明。

- (15) 又及 天 令丙刃公 本升安
 “*mō* ... *tëur-ēr* *arũk-ũr*”
 大きい.M 天 徳-INST 輔ける-NPST.M

「大いなる天は徳ある者を輔く」【興宗 6】

2.3. 『毛詩』大雅

『耶律宗教墓誌銘』〔遼重熙 22 年 (1053)〕には『毛詩』(『詩経』)の一節が引かれていることが愛新覚羅 [2003: 191] によって明らかにされている。

- (16) 豈弟君子，民之父母。

【『毛詩』大雅・洞酌】

- (17) 半 兕矢 令勺 冬本 公升来公 公亦 世 育及 几尺女 升 百
 «*mū sī*»-*nd* *tig:* “*asar najĕr kūn sī qarū kuy-un ai mē.*”
 毛³⁵⁾ 詩-DAT³⁶⁾ 曰く 安寧な³⁷⁾ 和悌の.M³⁸⁾ 君³⁹⁾ 子⁴⁰⁾ 民⁴¹⁾ 人-GEN⁴²⁾ 父⁴³⁾ 母⁴⁴⁾

公 关

kī.

と言う.NPST.F 「『毛詩』に曰く：「愷悌たる君子は民の父母である。」と云う。」【宗教 19】

-
- 35) 「毛」(LMC **māu*, OMC **mau*)。遼代北方音では唇音を声母とする中古効撰一等韻が遇撰一等韻と類似ないし合流していたと考えられ、「毛」のほか、丹及 *bū* 「保」(官名「守太保」[劉鳳翥、于宝麟 1977: 90])、止及 *pū* 「宝」(人名「多宝奴」[愛新覚羅 2013: 55])が見られる。効撰二等韻はその限りでない：丹央及 *baŋ*⁰「鮑」(人名「鮑叔牙」[吳英喆 2012b: 112])。
- 36) 「詩」(LMC **siĕj*, OMC **si*)
- 37) /*asr*/ 《やすらか、おだやか、ゆるやか》(漢語「寧」に対応する [即実 1982: 54, 57])。『遼史』卷 31 營衛志上に「寛大」曰「阿思」とある「阿思」(LMC **ʼā.siĕj*, OMC **e.si*) は契丹小字 冬本 *asar* に相当する [王弘力 1986: 59]。
- 38) /*naij*-/ 《(兄弟親類と) 仲良くする》[即実 1996: 133] は √*naij*- 《和する》(MMo. *naija*-) [即実 1996: 490] + *-i*。動詞接辞 *-i* の意味は未詳。
- 39) 「君」(LMC **küĕn*, OMC **güĕn*)
- 40) 「子」(LMC **tsiĕj*, OMC **zi*)
- 41) √*qarū* 《民》[愛新覚羅 2003: 190f]。
- 42) √*kuy*^w 《人》(*y^w* は語末で消失して前の母音の長母音化が生じるため、主格形は 几 *kū* となる) は MMo. *kü'ü(n)* 《*id.*》の同源語 [豊田 1991b: 110]。
- 43) √*ai* 《父；男の》[即実 1988]。
- 44) √*mē* 《母；女の》[契丹文字研究小組 1977: 65]。升 百 *ai mē* は《親，父母》。『遼史』卷 116 国語解に「「麼」，「母」稱。」とある「麼」(LMC **mā*, OMC **me*) が契丹小字 百 *mē* に対応する [Ibid.]。

2.4. 『論語』 学而篇

『蕭彦弼（太山）夫妻墓誌銘』〔遼壽昌元年（1095）〕には『論語』の一節が引かれる。

(18) 三年無改於父之道，可謂孝矣。

【『論語』 学而篇】

即実 [2012: 240f] や劉鳳翥ほか [2009: 93] に釈文があるが、字の区切りや語釈に問題がある。筆者の訳文は次の通り。

(19) 半女 安火矢 令勺 包 半今 羽相 半相 百史为出 百史 了
 «Lun ηū»-nd tig: “qūr aī-s ujen aī-n yaw-ān mēr ...
 論⁴⁵⁾ 語-DAT⁴⁶⁾ 曰く 三.F 年-PL 中⁴⁷⁾ 父-GEN⁴⁸⁾ 行う-PST.F⁴⁹⁾ 道⁵⁰⁾ NEG⁵¹⁾
 丸平及平丸 来关忝公丹伏 百史 叔北只羽 八关
 meylū-leg čišedbeñ mēr kēluy-uj.” kī.
 改める-LG⁵²⁾ 孝なる.F⁵³⁾ 道 と言うべき-ÜJ⁵⁴⁾ と言う.NPST.F

「『論語』に曰く：「三年間父が行った道（習慣）を改めないのは孝道と言うべきである。」と云う。」【彦弼 25-26】

45) 「論」(LMC *luēn, OMC *luēn)

46) 「語」(LMC *ηii, OMC *ü)

47) √ujn 《(…の) 間, 中》[趙志偉、包瑞軍 2001: 38]。

48) 連体修飾節内の主語は通例、属格で標示される。

49) √yaŋ-《行う》[即実 2012: 86] は MMo. yabu-《行く, 行う》の同源語。即実 [2012] や劉鳳翥ほか [2009] が 百史 为出 と 2 語に分けるのは正しくない。

50) 愛新覺羅・吉本 [2011: 35] は「訳」のみを挙げているので定かではないが、『蕭忽突董墓誌銘』〔遼大安 7 年 (1091)〕第 10 行の 几火 矢矢 百史 kūŋ māj-an mēr を「孔明の道」と訳しているようである。ただし「孔明」は誤りで「孔孟の道」（すなわち儒教, 儒学）と読むべきである。矢 は《千》を意味する MMo. miŋga(n) の同源語（豊田 [1997] の記述参照）で、その音韻形式は音法則および形態論的特徴を考慮して māj と推定される (*miŋga > *mājŋə > Khit. māj)。一方、「孟」(LMC *maj, OMC *mej) は中古梗撰二等韻、「明」(LMC *miāj, OMC *miēj) は梗撰三等韻であって、梗撰開口二等韻が通例 -並 -ēj [-ej] で写されるのに対し、梗撰開口三等韻は曾撰開口三等韻と同じく通例 -同 -ij [-iŋ] で写されることから、矢 māj [meŋ ~ meŋ] で梗撰三等韻の「明」を写した蓋然性は小さい。

√mēr 《道（英語 ‘way’ のように広汎な意味を表しうると思われる）》（女性名詞）は MMo. mör 《道, 跡》の同源語の可能性がある。

51) 「未だ…しなかった」[愛新覺羅 2013: 37] のような特定の否定表現だけでなく広く否定表現に用いられるので、‘not’ [Wu & Jnhunen 2010: 157, 196, passim] のように推定すべき。

以上4種の漢文典籍（『周易』『尚書』『毛詩』『論語』）からの引用の典拠が特定されており、その翻訳文中に使用される語彙・文法も多くは理解可能である⁵⁵⁾。次節では、まだ典拠が特定されていない引用文を何点か取り上げ、典拠を明らかにしたい。

3. 典拠の未だ明らかならざるもの

3.1. 『詩』に曰く」とあるもの

『耶律奴墓誌銘』には『毛詩』『尚書』『周易』の3つの経書の引用が明記されているが、このうち『書』と『易』の引用箇所はすでに特定されている（2.1節および2.2節参照）。残る『詩』の引用は次の如くである。

- (20) 凡矢 令勺 令半由 令半由 凡亦 世 引冬寺 捺 了 午引半关
 «Šī»-nd tig: “*ʔelbel ʔelbel gūn sī qasal qūdūq*” ... *talqay-ī*”
 詩-DAT 曰く ゆったりとした⁵⁶⁾ 君 子 邪な(?)⁵⁷⁾ 福 NEG 求める-NPST.M⁵⁸⁾

又

kī.

と言う.NPST.F 「『詩』に曰く：「愷悌たる君子は邪な幸福を追求しない。」と云う。」【奴 33】

- 52) 本来は 九平尺平凡 *meṭluyuleg* と綴られるべきもの。/meṭlyw-/《改める》。
- 53) /čišdbn/《孝行な.F》は √čiš《血縁》[愛新覚羅 2004d: 201] + 語類転換接辞（名詞→動詞）-d- + 形動詞接辞 -bn. čiš は MMo. *čisu(n)*《血》の同源語とされる [即実 1988: 56]。派生動詞 /čišd-/ は《(目上の親族に) 尽くす》。cf. 吉池 [2013]。この 来关冬全丹伏 *čišedben* は『遼史』卷 31 營衛志上に「「孝」曰「赤寔得本。」とある「赤寔得本」(LMC *tš'jäk.žičk.tek.pen, OMC *či.ši.dej.ben) に相当する。
- 54) /kēly-/ については別稿で論じる。
- 55) 他に呉英喆 [2012a] が未発表墓誌の銘文中に杜甫の詩『曲江二首』の一句「人生七十古来稀」が引かれていることを発見しているが、筆者は当墓誌銘未見のため本稿では取り上げない。また、『蕭知微（朮哲）墓誌銘」〔遼乾統 7 年 (1107)〕第 18 行に「『尚書』に曰く」として引用されるものは、愛新覚羅 [2009: 3] や即実 [2012: 326] が周書・泰誓下の一節「天有顯道，厥類惟彰。」に同定するが、この同定が正しいか否かは判断を保留する。
- 56) この /delbl/ と語根が共通する /delbē/ は次のように *asar*《安寧な》や *najjēr*《和悌の》(2.3 節参照) と共に用いられることから、類似する意味をもつと考えられる。
 令半丹券 公半来々 *ʔelbē najjēr*【承規 7】 公半止券 公半来々 *delpē najjēr*【涿州 24】
 冬本 令半丹券 *asar ʔelbē*【糺里 19】
 /delbl/ もそれに類似の意味をもつと思われる。語根 √delb- は WMo. *delbe-* (i.e. *delbeger*《広大な、寛大な》) と同源か [愛新覚羅 2004e: 75, 即実 2012: 145]。
- 57) /qasl/ の語義は後述の典拠の文意から推測した。愛新覚羅 [2002: 19] は《災禍》(cf. WMo. *gasalang*《悲しみ；災難》) の意とする。
- 58) /talqi-/《追求する、追究する》も原典の文意から推測した。推定を支持する引証については別稿で論ずる。

即実 [2010] は『詩』に上記の引用文と完全に対応する文は見られないとし、衛風・淇奥の詩句をもとにした「有匪君子，赫兮咺兮；有匪君子，寬兮綽兮」と小雅・采菽の詩句をもとにした「樂只君子，福祿申之；樂只君子，萬福攸同」を「大義相通」として挙げているが、前者は特に契丹語訳文の後半部分の意味が抜け落ちているし、後者も契丹語訳文に見られる否定表現が出ていない。

さて、註 56 で述べたところによれば、上文の 令々由 令々由 兀亦 忒 *telbel telbel giin sī* は (17) の 冬本 公中來々 兀亦 忒 *asar najjēr kün sī* 《豈弟君子》とほぼ同じ意味をもつと推測できる。そこで、『毛詩』の中から「豈弟君子」またはそれとほぼ同義の「樂只君子」を含む詩句で、かつ、意味が確実な「福」(捺)と否定詞(兀)を含むものを抽出すれば、該当する詩句はただひとつしかない。

(21) 豈弟君子，求福不回⁵⁹⁾。

【『毛詩』大雅・旱麓】

この詩句の意味は上記の契丹文とよく合致するため、その典拠と考えてよい。

3.2. 『毛詩』に曰く」とあるもの

3.2.1.

『蕭知微(朮哲)墓誌銘』〔遼乾統7年(1107)〕に、『毛詩』に曰く」として次の文が引かれている。

(22) 半 兀矢 令勺 (a) 兀才 兀 兀券 伏又券 (b) 兀久矣 兀 兀和 土矣
<mū šī>-nd tig: “šā kū ...ē herē yugur ... tum-en eur?
 毛 詩-DAT 曰く 善い⁶⁰⁾ 人⁶¹⁾ 賢い⁶²⁾ 賢い⁶³⁾ どうして⁶⁴⁾ NEG 万-GEN⁶⁵⁾ 齡⁶⁶⁾

59) 「回」の語義は、『毛詩』小雅・鼓鍾の「淑人君子，其德不回。」について毛伝が「回，邪也。」と註している。ただし，旱麓の「求福不回」については鄭箋が「不回者，不違先祖之道。」と註している。

60) √šak 《善い》。註 15 参照。

61) √kuγ^w 《人》。註 42 参照。

62) √...γ 《賢い》 [即実 1996: 256]。

63) 兀券 《賢い》と類似の意味を表す形容詞と考えられる。

64) 後述する出典との対応から推定した。

65) √tum 《万》は MMo. *tūme(n)* 《id.》 (OTu. *tümän*) の同源語 [王弘力 1986: 64]。

66) √eur 《齡，歳》(女性名詞) [王弘力 1986: 65, 豊田 1990: 7]。

(c) 女住关 来欠 夫及羽 舟穴刃 疋 几尺女 国岑 欠关
jül-ī čoq^w al-ūj būr jaṁ kuy-un bed-ēr. kī.
 ?-CNJ のみ 得る-ÜJ⁶⁷⁾ ? 百⁶⁸⁾ 人-GEN 身体-INST⁶⁹⁾ と言う.NPST.F

『毛詩』に曰く：「(a)淑人君子は(b)どうして万年ならざらんや。(c)××しさえするならば(?)、百人の身をもって。」と云う。【知微 14-15】

即実 [2012: 325] の指摘するように、この文と同じ漢文を訳したと見られるものが『耶律仁先墓誌銘』〔遼咸雍 8 年 (1072)〕に見られる。

(23) 由及 欠半矢 令勺 (a) 丑芬 几 凡亦 世 (b) 百欠安 了 及女 土安
beler kel-end tig: "...ē kū giin sī yugur ... tum-un eṙ?
 古の 言葉-DAT⁷⁰⁾ 曰く 賢い 人 君 子 どうして NEG 万-GEN 齡

(c) 来住关 来欠 夫半井羽 丑伏 疋 几尺女 国 百及 来在田
čül-ī čoq^w allūb-uj peñ jaṁ kuy-un bed yū čäiril.
 ?-CNJ のみ 得られる-ÜJ⁷¹⁾ ? 百 人-GEN 身体 ? ?

欠关

kī.

と言う.NPST.F

「古言に曰く：「(a)淑人君子は(b)どうして万年ならざらんや。(c)××できさえするならば(?)、百人の身××××。」と云う。【仁先 60】

こちらでは出典を『毛詩』と明言せず、「由及 欠半 に曰く」と言っている。即実 [2012: 325] は 由及 を「平常」の意とするが、この語は多くの文脈で 及芬 *erē* 《今》と対比的に用いられ、由及 及芬 という連語も存在することから、《古い》を意味すると考えるのが妥当である。

67) √al- 《得る》 [即実 1996: 231f]。ここでは助動詞として働いていると思われるが、義未詳。

68) √jaṁ 《百》 [契丹文字研究小組 1985 第二編第二章] は MMo. *ja'u(n)* 《id.》の同源語 [王弘力 1986: 64]。『遼史』卷 116 国語解に「「爪」, 「百數」也。」とある「爪」(LMC **tšau*, OMC **jaṁ*) は 疋 *jaṁ* に対応する [Ibid.]。

69) √bed 《身体》 [愛新覺羅・吉本 2011: 42, 吳英喆 2012c: 55, 愛新覺羅 2013: 40]。

70) √kel 《言葉》(女性名詞) [即実 2010: 5, 2012: 325] は MMo. *kele(n)* 《id.》の同源語 [吳英喆 2012a: 107]。

71) /allūb-/ については別稿で論じる。

- (24) 今女伏 火丙 九券 尺券 百安 用 五券 由又 又券 今本又和 土平火百
Suneñ Këu gē uy^wē čaur il ...ē beler erē särr-en euley-ej.
 遼寧 休 哥⁷²⁾ 于越⁷³⁾ 軍⁷⁴⁾ ? 賢い 古 今⁷⁵⁾ ?-ACC もたない-NPST.M

「遼寧休哥于越是軍才知略，古今類無し。」【奴6】

さて、本小節の始めに挙げた文は『蕭知微墓誌銘』で『毛詩』から引用したことが言明されているにもかかわらず、納得のいく典拠が示されていない。即実 [2010] は小雅・桑扈の「君子樂胥，萬邦之屏，之屏之翰，百辟爲憲」を「義稍可通」として挙げるものの、『詩』に契丹語訳文と（完全に）対応する文は見られないとしている。自身が認めているように「萬邦」に当たる語は訳文には見えないし、その他の対応関係も不明である。

3.2.2.

すでに意味が推定されている語を頼りに『毛詩』の中から典拠を求めよう。

又才 九 五券 伏又券 / 五券 九 九亦 才 が「淑人君子」を指すのは容易に推測できる。『毛詩』の中で「淑人君子」を含み、かつ否定詞（不）と 及和 土安 / 及女 土安 《万年》⁷⁶⁾を含む詩句は、曹風・鳴鳩の一節しかない。

- (25) (a)淑人君子，正是國人；正是國人，(b)胡不萬年？

【『毛詩』曹風・鳴鳩】

この同定が正しいとすると、契丹語訳文は「正是國人」に相当する訳語を欠いていることになる。しかも、契丹語訳文には続きがあり（下線部 c），その部分は別の詩篇から求めなくてはならない。ともかくも、不《百》，九《人》，因《身》の3語を含む一節は秦風・黄鳥にしかない。

72) 『遼史』巻83に立伝される遼の名将、耶律休哥(字は遼寧)を指す[愛新覚羅 2004e: 239-242, 即実 2012: 52f]。

73) $\sqrt{uy^w\dot{e}}$ 《「于越」(LMC $*\ddot{u}u.\ddot{u}ät$, OMC $*\ddot{u}.üä$)と音訳される称号》[契丹文字研究小組 1977: 76]。古代テュルク語の *öge* に由来すると考えられる。cf. 松井 [2013: 57f]。

74) $\sqrt{čaur}$ 《軍，戦》(女性名詞) [即実 1996: 175, 236] は『類説』巻5所引『燕北雜記』に「炒離是「戦」。」、『契丹国志』巻27歳時雜記に「炒離是「戦」。」、『遼史』巻53礼志六に「炒伍倆，「戦」也。」とある「炒離」(LMC $*(t\dot{s}'\dot{a}u).liěj$, OMC $*(čau).li$)，「炒伍倆」(OMC $*čau.u.(ž)$)に対応し，MMo. *ča'ur*《征戦》と同源 [韓百詩 1990: 281f, 孫伯君、聶鴻音 2008: 55]。

75) $\sqrt{erē}$ 《今》はMMo. *edü'e*《id.》の同源語と考えられる [豊田 1985]。契丹語における母音間の *d* のロータシズムおよび非初頭音節での $*ü'e > ē$ は序数詞接辞 $*-dū'er > -rēr$ において観察される。

76) 先行研究では、この字を 及和 土安 / 及女 今安 と誤って翻刻している。

(26) ^(c)如可贖兮，人百其身。

【『毛詩』秦風・黃鳥】

ところで、『耶律仁先墓誌銘』と『蕭知微墓誌銘』の撰者は別人であり、両墓誌の製作年代には35年の開きがある。少なくとも現在のところ、この2件の墓誌銘以外にこの文が引用されているのは発見されていない。

ここで大きな疑問が湧く。仮に上記の同定が正しいとして、別々の撰者が、それぞれ別個に『毛詩』から同じ2篇の詩の同じ箇所のみを引用するような偶然が起こりうるだろうか、と。

考えうるのは、両者に共通の引用元が存在したという可能性である。

3.2.3.

そこで遼代以前に著された書物に典拠を求めると、次の一節に行き着く。

(27) 『詩』云：「^(a)淑人君子，^(b)胡不萬年？」又云：「^(c)如可贖兮，人百其身。」

【白居易『祭微之文』〔唐大和5年(831)〕】

『祭微之文』は、親交の厚かった元稹(字は微之)〔779-831〕が任地で逝去し、その棺が白居易の住む洛陽に到着した際に元稹の霊を祭って白居易が詠んだ祭文であり、『白氏文集』に採録されている〔諸田 2012〕⁷⁷⁾。この一節は『毛詩』を引用して賢良なる故人を哀惜したものであるが、「又云」を除いて過不足なく上述の契丹語訳『毛詩』と同じ箇所が引用されており、その直接の典拠として正に最適といえる。つまり、契丹文墓誌銘の撰者たちは、上述の引用文を『毛詩』から直接引用したのではなく、白居易の祭文から孫引きしたのである。このように考えてこそ、2件の墓誌銘で『毛詩』の同じ2篇の詩の同じ箇所のみが引かれていることが説明できる。また、『耶律仁先墓誌銘』の撰者は、『毛詩』から引用したのではなく白居易の祭文から引用したからこそ、「『毛詩』に曰く」とはせずに「古言に曰く」としたのかもしれない。

契丹文墓誌銘の構成・書式は基本的に同時代の漢文のそれと変わるところがない。撰者が銘文を撰じるにあたって、『白氏文集』のような漢文の墓誌銘や祭文を取録する文集が模範となったことは容易に想像できる。そうであれば、経書の引用に限らず、契丹文墓誌には漢文の墓誌銘・祭文の類を範に取った表現が相当量含まれているにちがいない、そういった表現とその典拠を特定する作業もまた、契丹語の語彙・文法を解明する上で重要な意義をもつであろう。

77) 「前後続集本」である那波本では巻60に、「先詩後筆本」である馬元調本では巻69に収録されている。

3.3. 「古文にあるところによれば」とあるもの

『耶律智先墓誌銘』〔遼大安 10 年 (1094)〕は「古文」を引いて次のように記す。

- (28) 由又 北九矢 全月寺引芬 未关忝谷丹伏 疋 百史早引夫 穴 又企夫
beler ...eg-end sã-lq-ēr: “čišedbeñ jaṯ yau-lq-an naṯ, šēmüq”
 古の 文字-DAT⁷⁸⁾ ある-LG-INST⁷⁹⁾ 孝 百 行う-LG-GEN 頭⁸⁰⁾ 善い
- 包 百未わ 九安 … (中略) … 八关
qūr mēj-en umur: ” kī.
 三.F 道.PL-GEN⁸¹⁾ 始め⁸²⁾ と言う.NPST.F

「古文にあるところによれば、「孝は百行の首、善なる一切（衆善）の始なり。…（中略）…」と云う。」【智先 17-18】

umur の後も引用は続くが、誌面の状態が悪い部分もあって文意は把握できない。

即実 [2012: 86] は 由又 から 又企夫 までを「常諺説：百行孝爲首善」と訳すが、文の切れ目に問題がある上、典拠を提示していない。

筆者は、これを〔劉宋〕范曄撰『後漢書』の一節を典拠としていると考える。

- (29) 夫孝，百行之冠，衆善之始也。

【『後漢書』卷 39 江革伝】

ただし、後続の引用文が『後漢書』のものと一致しないようなので、『後漢書』江革伝のこの箇所を引用した別の文献から引用されている可能性もある。

78) 北九《字，文》（女性名詞）[契丹文字研究小組 1977: 66]。

79) √sã-《ある，いる》[即実 1996: 200]。正確な意味は不明。

80) √naṯ《頭，ものごとの第一，官人》[契丹小字研究小組 1977: 66]。『類説』卷 5 所引『燕北雜記』に「「嬾」是「丁」。」，『契丹国志』卷 27 歳時雜記に「「妳」是「丁」。」（「丁」は「正」の誤か），『遼史』卷 53 礼志六に「「廼」，「正」也。」とある「嬾（妳）」(LMC *naṯ, OMC *naṯ)，「廼」(LMC *nâj, OMC *naṯ) および『燕北雜記』に「「嬾」是「頭」。」，『契丹国志』同卷に「「妳」是「頭」。」，『遼史』同卷に「「耐」，「首」也。」とある「嬾（妳）」，「耐」(LMC *nâj, OMC *naṯ) はいずれも契丹小字の 穴 naṯ に対応する [Ibid.]。

81) /mēj/ は R 語幹である √mēr《道》（女性名詞）の複数形 (√mēr + i)。包 百未 *qūr mēj*《3 つの道》は天道・地道・人道のいわゆる「三才」で，すなわちこの世の一切のものを指す。

82) √umr《始め；始めの；始めに》。

3.4. 「××書に曰く」とあるもの

『蕭忽突董墓誌銘』〔遼大安7年(1091)〕には次の一節がある。

- (30) □安 又火矢 令勺 寸全 未本用 关化 止去 几尺女 尙 令丙刃 百岑
 //eŋ šū-nd tig: “bajs čäril īr püm kuy-un ...; tēyr mēr
 ?⁸³⁾ 書(?)-DAT 曰く 高貴な(?)⁸⁴⁾ 官位⁸⁵⁾ 品階⁸⁶⁾ 人-GEN 爵⁸⁷⁾ 徳 道
 全去刃 本当 关 尙 火关
 sūŋŋj̄ ...ēn” kī.
 能⁸⁸⁾ 才⁸⁹⁾ 天 爵 と言う.NPST.F

「××書に曰く：「高位高官は人爵なり；道德・才能は天爵なり。」と云う。」【忽突董 21】

この文は『孟子』の「人爵」と「天爵」に関する講話をふまえているようである。

- (31) 仁義忠信，樂善不倦，此天爵也；公卿大夫，此人爵也。

【『孟子』告子上】

しかし直訳ではなく、根本的には『孟子』に遡るとしても、何か別の典拠がある可能性は否定できない。また上記の契丹語訳文は、文法は極めて単純であるが、使用される語彙の意味は不明確で、更なる検討の余地がある。

83) この字の初めの字素は認定が困難である。筆者は2014年8月にこの墓誌を所蔵する内蒙古自治区赤峰市巴林左旗の契丹博物館で原石を確認したが、やはり判然としない。呉英喆 [2012b] は 兀 と判断して 兀安 又火 *geŋ šū* 「経書」(LMC **kiēŋ.šii*, OMC **giēŋ.šū*) と読んでいる。

84) 未詳。よくこの連語で用いられる。

85) *vir* 《名，称号，官位》[劉鳳翥、于宝麟 1981: 176]。

86) *√püm* 《品階》(男性名詞) < 「品」(LMC **p'iēm*, OMC **piēn*)。愛新覺羅 [2012: 217] は訳文を載せるのみなので定かではないが、『蕭敵魯古墓誌銘』〔遼天慶4年(1114)〕第10行の 卍化岑 止去关 关化矢 为申 *qudēr püm-ī īr-end āj* を「官は三品に居る。」と訳しているようである(筆者による直訳では「三品の官位にあつて、」となる)。漢語の唇音声母三等韻の母音を *Khit. ü* で借用した例として他に 又刃 *mür* 「密」(官名「枢密」, LMC **miēt*, OMC **mi*) を挙げることができる。

87) 尙 止去本 《爵禄》，关化 尙 《位爵(爵位)》。

88) 未詳。よく 火用 全去刃 *ujl sūŋŋj̄* という連語で用いられる。

89) 未詳。墓誌銘の撰述を遺族から依頼された撰者が謙遜して「臣は 本当 少なく 火用 薄けれども」という趣旨を述べる際に見られる表現。全去刃，本当，火用 とも類義の語であろうが、詳しい意味は不明。

4. おわりに

契丹文墓誌は今もなお年々出土が続いているので、また新たな漢籍の引用が発見されることがあろう。また、すでに発見・公表されている墓誌の中にも、それと気づかれずに眠っている引用文もあるかもしれない。実際、明らかに引用文と分かるが、主として語彙が不明なために出典が特定できず、本稿で取り上げなかったものもいくつか残されている。本稿で取り上げたものについても、語彙・文法の解釈の精度をより高める必要がある。

さて、本稿では新たに『白氏文集』、『後漢書』、『孟子』を典拠とする引用文が存在することを明らかにした。『白氏文集』には白居易作の多くの祭文や墓誌銘等が収録されており、契丹の墓誌撰者がこのような作品集を手本として墓誌銘を撰じたことは想像に難くない。

「はじめに」でも述べたように、漢籍の典拠を特定することは契丹語研究において重要な意義がある。本稿で全く新たに理解できた語彙・文法はそれほど多くはないけれども、すでに意味が推定されている語彙について新たな根拠が得られたことをも含めれば、本稿の貢献は大きい。なお、文法事項については別稿で論じる準備がある。

転写 (特に注記が必要なもののみ)

〈Khit., LMC, OMC 共通〉 $\ddot{a} = [\varepsilon]$, $e = [ə]$, $o = [ɔ]$, $\dot{u} = [o]$, $\ddot{u} = [y]$

〈Khit.〉 $\ddot{e} = [e]$, $q = [\chi]$ (initial) ~ $[x]$ (non-initial), $\varkappa = [ɣ \sim \emptyset]$, $y = [\gamma \sim \emptyset]$, $\dot{l} = [l \sim ʎ]$

\dot{p} , t , \dot{c} , k は綴字上 p , t , \dot{c} , k であるが音韻上 b , d , j , g と考えられるもの。

〈LMC〉 $a = [a]$, $\hat{a} = [a]$, $\dot{k} = [k]$

〈OMC〉 $z = [ts]$

略号

〈契丹小字墓誌〉

| | |
|------|--------------------------------------|
| 承規 | 『耶律承規墓誌銘』〔遼乾統元年 (1101)〕 |
| 敵烈 | 『耶律敵烈墓誌銘』〔遼大安 8 年 (1092)〕 |
| 華嚴奴妻 | 『蕭華嚴奴 (孝思?) 妻耶律氏墓誌銘』〔遼天慶 5 年 (1115)〕 |
| 忽突董 | 『蕭忽突董墓誌銘』〔遼大安 7 年 (1091)〕 |
| 糺里 | 『耶律糺里墓誌銘』〔遼乾統 2 年 (1102)〕 |
| 勉辛 | 『蕭勉辛墓誌銘』〔金大定 15 年 (1175)〕 |
| 奴 | 『耶律奴墓誌銘』〔遼寿昌 5 年 (1099)〕 |
| 仁先 | 『耶律仁先墓誌銘』〔遼咸雍 8 年 (1072)〕 |
| 兀没 | 『耶律兀没墓誌銘』〔遼乾統 2 年 (1102)〕 |
| 宣懿 | 『宣懿皇后哀冊』〔遼乾統元年 (1101)〕 |
| 彦弼 | 『蕭彦弼 (太山) 夫妻墓誌銘』〔遼寿昌元年 (1095)〕 |
| 知微 | 『蕭知微 (朮哲) 墓誌銘』〔遼乾統 7 年 (1107)〕 |

| | |
|----|-----------------------------|
| 智先 | 『耶律智先墓誌銘』〔遼大安 10 年 (1094)〕 |
| 仲恭 | 『蕭仲恭墓誌銘』〔金天德 2 年 (1150)〕 |
| 涿州 | 『涿州刺史墓誌銘殘石』〔遼乾統 8 年 (1108)〕 |
| 興宗 | 『興宗皇帝哀冊』〔遼清寧元年 (1055)〕 |
| 宗教 | 『耶律宗教墓誌銘』〔遼重熙 22 年 (1053)〕 |

〈言語名〉

| | | | | | |
|-------|--------|------|----------|------|---------|
| Khit. | 契丹語 | MMo. | 中期モンゴル語 | OTu. | 古代テュルク語 |
| LMC | 後期中古漢語 | OMC | 古官話 (漢語) | WMo. | モンゴル文語 |

〈文法事項〉

| | | | | | | | |
|-----|-----|-----|----|------|----|------|-----|
| ACC | 対格 | F | 女性 | INST | 造格 | NPST | 非過去 |
| CNJ | 連結 | GEN | 属格 | M | 男性 | PL | 複数 |
| DAT | 与位格 | IMP | 命令 | NEG | 否定 | PST | 過去 |

参考文献

- 愛新覺羅烏拉熙春, 2002, 契丹小字的語音構擬, 『立命館文学』 577: 1-63.
- 愛新覺羅烏拉熙春, 2003, 契丹小字的表意文字, 『立命館言語文化研究』 15(2): 181-198 (愛新覺羅 [2004e: 26-43] に再録).
- 愛新覺羅烏拉熙春, 2004a, 契丹語名詞の格与数, 愛新覺羅 [2004e: 123-146].
- 愛新覺羅烏拉熙春, 2004b, 契丹語的動詞後綴, 愛新覺羅 [2004e: 147-178].
- 愛新覺羅烏拉熙春, 2004c, 契丹語的序数詞, 愛新覺羅 [2004e: 179-187].
- 愛新覺羅烏拉熙春, 2004d, 契丹語的親属称谓及相關名詞, 愛新覺羅 [2004e: 188-209].
- 愛新覺羅烏拉熙春, 2004e, 『契丹語言文字研究』 京都: 東亜歴史文化研究会.
- 愛新覺羅烏拉熙春, 2004f, 契丹横帳考 —— 兼論帳、宮、院之關係, 愛新覺羅 [2004h: 1-10] (『立命館文学』 582: 57-66 にも所収).
- 愛新覺羅烏拉熙春, 2004g, 契丹蒙古札記, 愛新覺羅 [2004h: 103-126] (『立命館文学』 586: 1-24 にも所収).
- 愛新覺羅烏拉熙春, 2004h, 『遼金史与契丹女真文』 京都: 東亜歴史文化研究会.
- 愛新覺羅烏拉熙春, 2009, 金上京女真大字石刻考 —— 金啓琮先生九十冥寿記念一, 『愛新覺羅烏拉熙春女真契丹学研究』 京都: 松香堂書店, pp. 1-12.
- 愛新覺羅烏拉熙春, 2012, 『新出契丹史料の研究』 京都: 松香堂書店.
- 愛新覺羅烏拉熙春, 2013, 契丹小字新発見資料の积読及び相關問題, 『立命館文学』 632: 35- 69.
- 愛新覺羅烏拉熙春・吉本道雅, 2011, 『韓半島から眺めた契丹・女真』 京都: 京都大学学術出版会.
- 清格爾泰, 1992, 契丹小字中的動詞附加成分, 『民族語文』 1992(2): 1-9.

- 高路加. 1988. 契丹小字複数符号探索. 『内蒙古大学学报 (哲学社会科学版)』1988(2): 44-51.
- 韓百詩 (Hambis, Louis) [著], 董果良 [訳]. 1990. 契丹文字破訳初探. 『遼金契丹女真史訳文集』第1集, 王承礼 [主編], 長春: 吉林文史出版社, pp. 277-291 (フランス語からの翻訳, 原論文は1953年刊).
- 即実. 1982. 契丹小字字源挙隅. 『民族語文』1982(3): 54-60, 11.
- 即実. 1988. 從 奚 丹カ 説起. 『内蒙古大学学报 (哲学社会科学版)』1988(4): 55-69.
- 即実. 1994. 一個契丹原字的弁説. 『民族語文』1994(5): 70-71.
- 即実. 1996. 『謎林問徑 —— 契丹小字解読新程』瀋陽: 遼寧民族出版社.
- 即実. 2010. 契丹小字墓誌中之漢籍典故. 中国民族古文字研究会成立30周年慶祝大会 (2010年8月28, 29日, 承德) 論文.
- 即実. 2012. 『謎田耕耘: 契丹小字解読続』瀋陽: 遼寧民族出版社.
- 劉鳳翥. 1987. 若干契丹小字的解読. 『民族語文』1987(1): 62-65, 6.
- 劉鳳翥、于宝麟. 1977. 契丹小字《許王墓誌》考釈. 『文物資料叢刊』1: 88-104.
- 劉鳳翥、于宝麟. 1981. 《故耶律氏銘石》跋尾. 『文物資料叢刊』5: 175-179.
- 劉鳳翥、唐彩蘭、青格勒. 2009. 『遼上京地区出土的遼代碑刻彙輯』北京: 社会科学文献出版社.
- 松井太. 2013. 契丹とウイグルの関係. 『契丹 [遼] と10~12世紀の東部ユーラシア』荒川慎太郎・澤本光弘・高井康典行・渡辺健哉 [編], 東京: 勉誠出版, pp. 56-69.
- 諸田龍美. 2012. 白居易「微之を祭る文」訳注. 『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』32: 63-74.
- 契丹文字研究小組 (清格爾泰、劉鳳翥、陳乃雄、于宝麟、邢苒里). 1977. 關於契丹小字研究. 『内蒙古大学学报 (哲学社会科学版)』1977(4), 契丹小字研究專号.
- 契丹文字研究小組 (清格爾泰、劉鳳翥、陳乃雄、于宝麟、邢復礼). 1985. 『契丹小字研究』北京: 中国社会科学出版社.
- 白鳥庫吉. 1970. 東胡民族考. 『白鳥庫吉全集』第四卷 塞外民族史研究 上, 東京: 岩波書店, pp. 63-320 (1910-13年の『史学雑誌』諸号に原載).
- 孫伯君、聶鴻音. 2008. 『契丹語研究』北京: 中国社会科学出版社.
- 豊田五郎. 1985. 契丹小字 ㄋ の新解釈について. 『京都産業大学国際言語科学研究所所報』7(1): 47-50.
- 豊田五郎. 1990. 契丹小字の方位と若干の数詞について. 1990年11月付未公刊手稿.
- 豊田五郎. 1991a. 契丹小字《耶律仁先墓誌》読後. 1991年6月23日付未公刊手稿.
- 豊田五郎. 1991b. 關於契丹小字的幾点探索. 『内蒙古社会科学』1991(3): 105-114.
- 豊田五郎. 1997. 契丹小字に保存された中古蒙古語の痕跡 —— 永福と春秋と数詞一. 日中合同文字文化研討会 (1997年8月19, 20日, 瀋陽) 講演資料.
- 王弘力. 1986. 契丹小字墓誌研究. 『民族語文』1986(4): 56-70.
- 吳英喆. 2007. 『契丹語静詞語法範疇研究』呼和浩特: 内蒙古大学出版社.
- 吳英喆. 2012a. 契丹文典故“人生七十古来稀”. 『中央民族大学学报 (哲学社会科学版)』2012(6): 106-109.

- 呉英喆. 2012b. 契丹小字「胡睹董審密墓誌銘」考釈. 『アジア・アフリカ言語文化研究』84: 105-139.
- 呉英喆. 2012c. 『契丹小字新発見資料釈読問題』府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- WU Yingzhe & Juha JANHUNEN. 2010. *New Materials on the Khitan Small Script: A Critical Edition of Xiao Dilu and Yelü Xiangwen*. Folkestone: Global Oriental.
- 吉池孝一. 2013. 契丹語の孝について. 『KOTONOHA』124: 11-17.
- 趙志偉、包瑞軍. 2001. 契丹小字《耶律智先墓誌銘》考釈. 『民族語文』2001(3): 34-41.